質的研究・量的研究とKJ法

近年、聞き取り調査等に基づく質的研究手法の開発と普及が進み、数量データに基づく量的研究との橋渡しを行う教科書も刊行されている。しかし両分野の相互関係については未整理な部分が多く残されているように思われる。以下では筆者の意見を３点述べたい。

①　質的研究と量的研究の間では、双方から異なる道筋で相互接近が進んでいる。

質的研究における量的研究への接近とは、量的研究の影響を受けたシステマチックな手法の開発である。分析手順の定型化による透明性の向上や、統計分析の比較検証ロジックおよび各種概念の借用などである。これらは量的研究からの批判への対応でもある。

一方、量的研究における質的研究への接近とは、対象となるデータの範囲が重なってきたことである。統計分析で扱うデータは数量データからカテゴリーデータ（選択肢や事象の有無）へ、そして伝統的に質的研究の対象であるテキストデータへと広がってきた。

②　ある種の質的研究と統計分析は情報の縮約方法に類似点があり、対比によって理解が深まる。

質的研究の手法の一つとして、わが国ではＫＪ法がしばしば用いられてきた。一方、海外で開発されたＧＴ（グラウンデッド・セオリー）法も積極的に紹介され有名になった。

ＫＪ法、ＧＴ法はともにデータをラベルに分解したうえで再構成する。細かく分断された大量の情報から全体のパターンを浮かび上がらせる機能は、多変量解析とよく似ている。

ＫＪ法の基本的な手順は、手持ちの情報をラベルに書き込んでばらばらに分け、次に多くのラベルの中から主観的に近いと思われるもの同士を統合し見出しをつけて新たなラベルとし、ラベル同士の統合を繰り返していくというものである。この手順は、多変量解析の一種である階層的クラスター分析を心理的距離に基づいて行うものとみなせる。クラスター分析は探索的な手法であり、仮説検証的な手法ではない。ＫＪ法も本質的には同様の性格を有すると考えられる。

他方のＧＴ法は軸となる概念を中心に情報を整理する点で因子分析に似ているように思う。探索的因子分析、検証的因子分析、階層的因子分析などもＧＴ法とよく対応しているのではないか。ただし筆者はＧＴ法を実際に使用していないため明確なことは言えない。

③　質的研究の手法は論点整理や発想支援の機能を備えており、量的研究にも有用な場合がある。

例えばＫＪ法にはクラスター分析にはない特色がある。ラベルを統合し新たな見出しを付す過程で、統合の理由を考える中から新たな考察、発想が生まれてくるのである。また、ラベルが数個まで集約された段階では、それら相互間の関係を検討して論点を整理する。ＧＴ法にも発想を促す様々な工夫がある。

量的研究は一見すると厳密性と透明性を有するように見える。しかし実際のところ、それがいえるのは実験および統計モデルによる仮説検証の部分だけであろう。仮設の構築や、分析結果に基づく推論の過程はいわば名人芸で多分に不透明なところがあり、かつての質的研究に対する批判がそのまま当てはまるのではないか。こうしたところに質的研究手法の成果を取り入れることはできないであろうか。実際、筆者は統計分析の結果の整理にＫＪ法を活用して成功した経験がある。

（主任研究員　平澤明彦）

ここに掲載されているあらゆる内容の無断転載・複製を禁じます。